

小学校教諭および保育者養成カリキュラムの検討 その2 : 本学科の音楽・図画工作・体育教育の変遷 と卒業生を対象とした調査

著者	林 亨, 高野 裕, 晴山 紫恵子, 桑原 雅子, 水谷 一郎, 関谷 正子, 川村 道夫, 紺野 忠一郎, 出淵 護, 谷本 百子, 星 信子, 菊地 達夫, 青池 美紀
雑誌名	北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要
巻	43
ページ	87-100
発行年	2005-03-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000789/

小学校教諭および保育者養成カリキュラムの検討 その2 —— 本学科の音楽・図画工作・体育教育の変遷と卒業生を対象とした調査 ——

The Research for Improvement of the Training Curriculum of
Elementary School Teachers, Kindergarten Teachers, and Nursery Teachers (2)

林	亨	高野	裕	晴山	紫恵子
Toru	HAYASHI	Yutaka	TAKANO	Shieko	HAREYAMA
桑原	雅子	水谷	一郎	関谷	正子
Masako	KUWABARA	Ichiro	MIZUTANI	Masako	SEKIYA
川村	道夫	紺野	忠一郎	出淵	護
Michio	KAWAMURA	Chuichiro	KONNO	Mamoru	DEBUCHI
谷本	百子	星	信子	菊地	達夫
Momoko	TANIMOTO	Nobuko	HOSHI	Tatsuo	KIKUCHI
		青池	美紀		
		Miki	AOIKE		

1. はじめに

本学科が1969年（S44）に設置された背景には、明確な社会からのニーズがあった。それは、北海道の小学校における音楽・図画工作・体育の教員不足と女子教員の比率が全国平均の半分であった状況から、それらを補う必要があるという教育現場からの要請であった。学科設置から30年近く経過した10年程前までは、我々教員も学生も当時の状況を引き継いだ教育現場からの期待を感じることができる教育環境にいたといえる。

しかしながら、急激な少子化により子どもを取り巻く環境が劇的に変化している昨今、あらゆる教育・保育機関は、基本理念から具体的な教育方法まで、すべてに根本的な見直しが求められている。そのなかで、我々はとくにこの7年間、「社会的ニーズ」を常に見直し、それに応え得るカリキュラムを検討してきた。その一つの答えが来年度から実施する新たなカリキュラムである。そして、学科名称も「初等教育学科」から「こども学科」へと変更する予定である。そのカリキュラムは「幼児・児童の保育や教育及びこどもに関する諸問題に適切に対応できる技術や実践力を身に付けた人間性豊かな人材の育成」という教育目標を指標としてかたちづけられ、「0才から12才までの子どもをトータルに捉える」と「音楽・美術（図画工作）・体育教育を中心に据える」という二つの大きな考え方に基づいて展開される。本稿は、この7年間の検討の集大成であるそのカリキュラムの有効性を検証するものである。

筆者が担当する部分は次の二つである。ひとつは、過去7年間のカリキュラムの変遷を、音

楽・図画工作・体育の三教育（以下三教育とする）にスポットを当て整理して、本学科が具体的なカリキュラム編成をしながら、どのような教員・保育者養成教育（以下養成教育とする）を考えてきたか明らかにすること。もう一つは、過去5年間の卒業生に対して行ったアンケート調査の結果を基に、実際にそのカリキュラムが、教育・保育現場でどの程度有効だったのか探ることである。

2. 音楽・図画工作・体育の三教育の変遷

そもそも本学科の教育に、音楽・図画工作・体育教育が中心に据えられた経緯は、先に述べたとおり、「北海道における音楽・図画工作・体育の教員不足を補う必要ある」という本道小学校長会の要請を受け、これに応える課程をおいたことを端緒としている。言うなれば明確な「社会的ニーズ」があったからである。また、1963年（S38）短期大学として開学した本学が、当時、服飾美術科、工芸美術科、体育科という三つの学科を有し、各分野に優れた指導者がいて、多彩なカリキュラムを編成できる条件があったことと、さらに、三教育を中心に据えることによって、それらを基礎技能の中心として、本来の子どもの成長を見据えた教育・保育が可能であるという認識がこの流れに一貫してあったのである。

開学以来40年を経過し、その間幾度となくカリキュラムも改編されてきた。最近20年間をみても、1985年（S63）には、幼稚園就職希望者の増加に対応して大きく改編し、1994年（H6）には、短期大学設置基準の全面的な改正に伴う全学的なカリキュラム見直しのなかで、小学校教諭養成と幼稚園教諭養成、それに三教育の充実を柱としながらも、環境問題や高度情報化に対応したカリキュラム改編が行われている。

しかし、2002年（H14）の保育士養成課程の新規導入前後数年間ほど、めまぐるしい改編を繰り返していた時期はない。そこで、1994年（H6）の改編時とほぼ同様の1998年（H10）のカリキュラム、教員免許法改正に伴う2000年（H12）のカリキュラム、保育士養成課程導入時の2002年（H14）のカリキュラム、そして定員増に伴う来年度2005年（H17）からのカリキュラムを比較しながら、音楽・図画工作・体育の三教育がどのように変わってきたか示す。

まずは、本学科で実施されてきた、音楽・図画工作・体育教育に関連する科目を次の三つに分類して整理してみる。まずは、(A)学生全員に必修にしている科目。次に(B)コース別に必修にしている科目。そして(C)教職や卒業認定に関わる選択科目である。これらの講義、実習、演習は、すべて音楽、図画工作、体育の三コースの基本的な科目として関連づけて構成されており、いわゆるコース制の根本を成すものである。ただし、ここでいう必修とは、教員免許状や保育士資格取得のための必修ではなく、本学科が、教員・保育者として身に付けるべきだと考え卒業要件として必修にしているものである。

まずは、学生全員に必修にしている科目についてであるが（表1）、基礎的な実技科目を三教育すべて1年次の各学期1コマずつ履修させる点は変わっていない。ただ、2002年（H14）から大きく変化した点がある。それは三教育に関する基礎的な内容を教授する講義科目を必修

表1 (A) 学生全員に必修にしている科目

1998年 (H10) 合計9単位			2000年 (H12) 合計9単位		
科目名	方法	実施時期	科目名	方法	実施時期
器楽Ⅰ	実	1前①後①	器楽Ⅰ	実	1前①後①
デッサン	実	1前①後①	デッサン	実	1前①後①
基本運動	実	1前①後①	基本運動	実	1前①後①
音楽	講	1前①	音楽	講	1前①
図画工作	講	1後①	図画工作	講	2前①
体育	講	1前①	体育	講	1前①

2002年 (H14) 合計6単位			2005年 (H17) 合計7単位		
科目名	方法	実施時期	科目名	方法	実施時期
器楽Ⅰ	実	1前①後①	器楽Ⅰ	実	1前①
基本造形	実	1前①後①	基本造形Ⅰ	実	1前①
基本運動	実	1前①後①	基本運動Ⅰ	実	1前①
			器楽Ⅱ	実	1後①
			基本造形Ⅱ	実	1後①
			基本運動Ⅱ	実	1後①
			器楽応用	実	②後①

(表記注：実実習、講は講義を指す。また実施時期の表示「1前①」は1年次前期に実施され単位数は1単位ということである。)

課程認定のための2000年(H12)のカリキュラム改編の際には、筆者を含む音楽、図画工作、体育担当教員の話し合いで、幼児教育的な視点を増やした内容に見直した。「図画工作」という講義についていえば、本来は、小学校の教科指導のための講義であるべきところ、実質的には子どもの造形教育概論という内容にしている。また、美術(図画工作)関係の必修実習科目では、2002年(H14)に「デッサン」から「基本造形」へと名称とともに内容も大幅に変えた。美術専門の科目設定から、幼児造形全般を扱うような内容に変更した。さらに、他の実習科目を「子どもの表現」というように「子ども」という表記を使った科目を増やした。その教授内容に関しても、それぞれ科目名や内容を講義科目同様に改編している。いずれも、教師・保育者として必要な基礎技能をしっかりと身に付けてもらおうとする科目群である。ただしピアノ実習については、「器楽Ⅰ」の時間でだけでは足りないとの考え方から、(C)教職や卒業認定に関わる選択科目「器楽Ⅱ」として設定し、出来るだけ全員履修するように一貫して指導してきたが、2005年(H17)からは、全員必修科目「器楽応用」とし、ピアノ演奏技術の一層の向上を図ることとした。

コース別に必修にしている科目は、本学科のカリキュラムの特徴を象徴するものである(表2)。三コース別にクラス編成し、そのクラスごとに選択させ履修させるのである。ただし、

からはずしたことである。これについては、当時の三教育担当者の話し合いでも賛否相半ばした改編であったが、全学的なカリキュラムの見直し作業の中では、どうしてもさけられない状況であった。その結果現在では、その前年までのおよそ70%から80%の履修率である。実技だけでなく、基礎的な知識についてもしっかりと身に付けさせたいというこちらの意図は、ある程度浸透していると考えられるが、学生の気質として、講義科目いわゆる座学を嫌う傾向はこの7年間で強くなったという印象はぬぐえない。

教員も講義内容を学生の卒業後の進路状況を考慮し変えてきた。教員免許法改正に伴う再課程

表2 (B) コース別に必修にしている科目 (表記法は表1と同じ)

1998年 (H10)		合計 5 単位		2000年 (H12)		合計 6 単位	
	科目名	方法	実施時期		科目名	方法	実施時期
音楽コース	合唱指導法Ⅰ	実	1 後①	音楽コース	演奏基礎Ⅰ	実	1 前①
	合唱指導法Ⅱ	実	2 前①		演奏基礎Ⅱ	実	1 後①
	合奏指導法	実	2 前①		演奏指導法	実	2 前①
	総合音楽論	講	2 後②		演奏研究	実	2 後①
図画工作コース	版画	実	2 前①		音楽科指導法	講	2 前②
	絵画	実	1 前①		図画工作コース	基礎造形	実
	彫刻	実	2 前①	現代造形と鑑賞		実	2 後①
	工芸	実	2 後①	デザインと工芸		実	1 後①
	デザイン	実	1 後①	造形遊びと教材		実	2 前①
図画工作科指導法	講	2 前②	図画工作科指導法	講		2 前②	
体育コース	身体運動指導法	実	1 後①	体育コース	スポーツ指導法	実	1 前①
	健康運動指導法	実	1 前①		体操・器械運動	実	1 後①
	水中運動	実	2 前①		水中運動	実	2 前①
	野外運動	実	2 後①		スキー	実	2 後①
	スポーツ指導法	実	2 後①		体育科指導法	講	2 前②

2002年 (H14)		合計 6 単位		2005年 (H17)		合計 5 単位	
	科目名	方法	実施時期		科目名	方法	実施時期
音楽コース	演奏基礎	実	1 前①後①	音楽専修	演奏基礎Ⅰ	実	1 前①
	子どもの表現 (おと)	実	2 前①後①		演奏基礎Ⅱ	実	1 後①
	音楽科指導法	講	2 前②		子どもと音楽Ⅰ	実	2 前①
図画工作コース	美術表現	実	1 前①後①		子どもと音楽Ⅱ	実	2 後①
	子どもの表現 (いろ・かたち)	実	2 前①後①		学外演習	実	集中
	図画工作科指導法	講	2 前②		美術専修	美術表現Ⅰ	実
体育コース	基本運動Ⅱ	実	2 前①後①	美術表現Ⅱ		実	1 後①
	子どもの表現 (うごき)	実	1 前①後①	こどもと造形Ⅰ		実	2 前①
	体育科指導法	講	2 前②	こどもと造形Ⅱ		実	2 後①
体育専修	運動基礎Ⅰ	実	2 前①	学外演習		実	集中
	運動基礎Ⅱ	実	2 後①	体育専修	子どもと運動遊び	実	1 前①
	子どもと運動遊び	実	1 前①		子どもの野外活動	実	1 後①
	子どもの野外活動	実	1 後①		学外演習	実	集中
	学外演習	実	集中				

表3 (C) 教職や卒業認定に関わる選択科目 (表記法は表1と同じ)

1998年 (H10) 合計 9 単位			2000年 (H12) 合計 5 単位		
科目名	方法	実施時期	科目名	方法	実施時期
器楽Ⅱ	実	2 前①	器楽Ⅱ	実	2 前①
器楽Ⅲ	実	2 後①	子どもの遊び指導法	実	1 前①後①
幼児と遊び	実	1 前①後①	子どもの絵本指導法	講	1 前②
幼児と絵本	講	1 前②			
音楽科教育法	講	2 前②			
図画工作科教育法	講	2 前②			
体育科指導法	講	2 前②			

2002年 (H14) 合計 5 単位			2005年 (H17) 合計 4 単位		
科目名	方法	実施時期	科目名	方法	実施時期
器楽Ⅱ	実	2 前①	子どもと遊び	実	1 前①後①
子どもと遊び	実	1 前①後①	子どもと絵本	講	1 前②
子どもと絵本	講	1 前②			

時間数からいうと各学期に一コマしかないのだが、三教育専攻別に分けられたクラス全員が出席する科目が週に一回でも必ずあるということは、時数の多少に関わらず三コースつまり三教育専攻クラスへの所属意識が強くなるようである。さらに、実際の履修科目や単位数からだけこのコース制の特質を考えるのは不十分である。講義や実習以外に実際に学生が時間を費やして活動するものがいくつかある。コース別の研修旅行や学外発表会等がそうである。それらの活動から学べる事柄については、卒業生の面談でも多くの学生が、高い評価を示している。

これらの科目のこの7年間の変遷を見ると、必修科目同様に単位数が減っている。1998年 (H10) は5単位あったが2005年 (H17) から4単位になる。実際のところは、2000年度 (H12) にすでに実習科目が1科目1単位減っているのであるが、三教育の教科指導法 (講義) を必修に変えることで、不足分を充当することにした。

1998年 (H10) ころは、まだ学科創設当初の流れをくんだ小学校教員養成に力点が置かれた内容になっていた。筆者が担当の美術関係科目についていえば、「絵画」「彫刻」など、一般美術の分類名であり、小学校の学習指導要領に沿った科目名だった。それを、幼児の造形活動の視点を大胆に取り入れた内容に変えたわけである。つまり、教職養成課程改編に伴う本学カリキュラムの2000年 (H12) の改編は、小学校教諭の採用数が激減し、それに伴う卒業後の就職先の割合が大きく変化するのに合わせて、幼児教育にシフトした内容となってくる。これらの経緯を見ると、2002年 (H14) から導入することになる保育士養成のカリキュラム改編へとつながる道筋がすでにできていたことになる。そして翌年度、種々のハードルを越えて三つの資格・免許が二年間で同時に取得出来る体制にできる見通しができたため、大量の保育士資格課程科目の導入に伴うさらなるカリキュラム改編が迫られることになる。

保育士養成カリキュラムを導入した2002年（H14）の改編は、当初、相当数の授業時数増が見込まれ、旧カリキュラムのスリム化が必至であったが、三教育に関する科目についてはその主旨を残そうという同意の元、ほとんど変わらない設定を残すことになった。ただし、単位数は変わらないが、通年履修科目にしたために、科目数としては2科目となった。

2005年（H17）の改編は、前回の改編からわずか2年しか経過していないのだが、カリキュラムの改編に止まらず、いくつかの点で重要な変更がある。その一つは、新たなコース制の設定である。児童コース、幼児コース、保育コースの三つのコースを設定することによって、三職種のいずれかに軸足を置かせて「0才から12才までの子どもをトータルに捉える」ようにさせようという意図がある。卒業生の意見のなかにも、志望職種を絞った学習の必要性を指摘するものがいくつかあった。基本的には、履修登録をする際に自分のコースを決めて、それに沿ったカリキュラムを組むよう指導するものである。したがって、従来のコース制であった音楽、図画工作、体育コースをそれぞれ音楽、美術、体育専修クラスという呼称に変え、本学科の大きな特徴のひとつであるコース制を、三教育からその主役を職種に譲ったと言える。つまり、三教育に重点を置きつつも、自分の進路をできるだけ早めに意識させて勉強させたいという意図がある。他にも、定員を増やしたり、卒業要件から教員免許状取得をはずしたりと、重要な変更点があるが、これから新カリキュラムが実践される中で、優れた人材を養成するために、これまで以上に三教育が活かされるよう検討する必要があると考えている。

3. 卒業生を対象とした調査

前項までは、我々教員側からみた話を中心に進めてきたが、ここからは、それらのカリキュラムを履修していった学生達が、実際の教育・保育の現場でどう感じているのか、アンケート結果を基に考えていきたい。

今回のいくつかの調査では、これまで我々教員が実践してきた養成教育に対する評価が明らかになる部分もあり、耳の痛い内容のものも少なからずあった。しかし、これらは自己点検の重要な検討データにもなりうるし、何よりも、今まで余り出来なかった卒業生との連携作業が出来るきっかけになったことは大きな収穫であった。ただし、調査対象の卒業生を過去5年間に限っていることから、現場で中堅以上の教員・保育者として働いている卒業生の話が訊けていない点を、十分考慮しなければならないし、データの読み取り方も慎重にしなければいけないだろう。

◎調査方法

〈1〉質問紙調査

過去5年間の本学科卒業生を対象とする質問紙調査を実施した。

(1)調査用紙：

①コース制について

②カリキュラムについて

(2)調査方法：すべて郵送により送付・回収を行った。

(3)調査期間：2004年（H16）9月

(4)回収数 110

〈2〉面接調査

2004年（H16）10月10日（日曜日）札幌市中央区ホテルライフオーブにおいて、2004（H16）年度卒業生座談会を開催。24名の参加があった。教員および就職関係の職員が2名程度に対して卒業生が4人から6人のグループを作り、以下の点について話し合った。

- ①就職活動で苦労した点・よかった点
- ②実際に就職してみて一番苦労している事
- ③仕事上での喜びや成長
- ④後輩の指導に関して、改善すべき点についてのアドバイス（就職活動・実際の仕事内容などをふまえて）
- ⑤その他、学科への提言
- ⑥コース制についての意見
- ⑦全体を通して気づいた点や意見

◎結果および考察

まずは、質問紙調査の結果から見てみると、就労先の内訳は概ね毎年の進路状況の割合を反映している（図1）。ただし、保育士については、ほとんどが保育士養成カリキュラムを取り入れて最初の卒業生、2004年（H16）3月の卒業生である。

まず、現行の音楽、図画工作、体育のコース制についての三つの質問をまとめた表をみると、

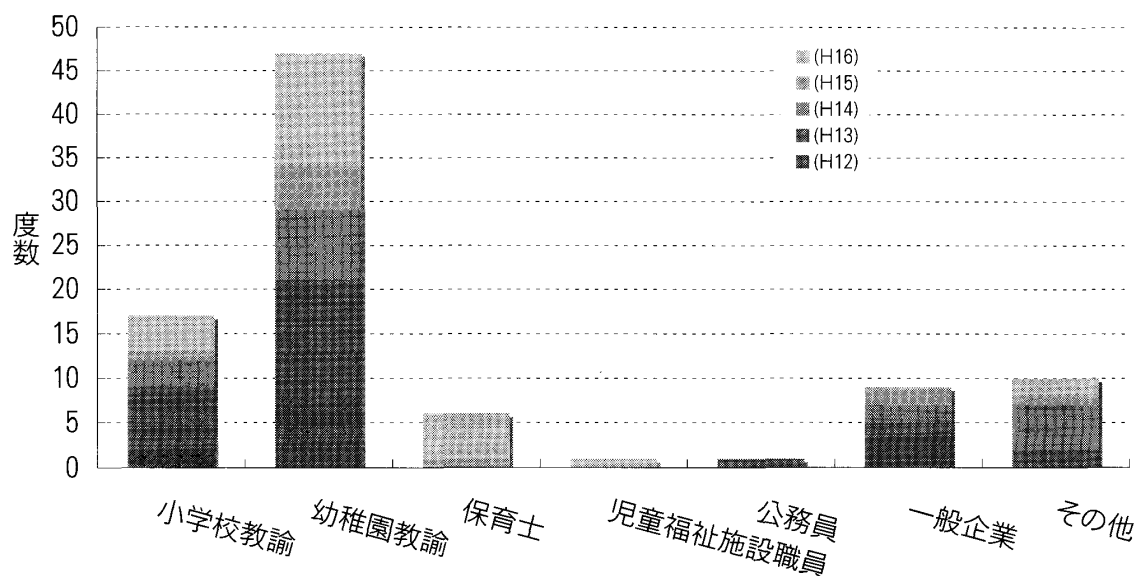


図1 回答者の職種

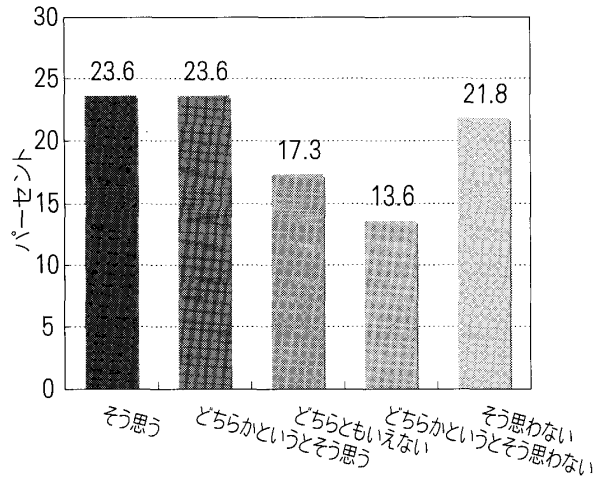


図2 コース制が入学先選択に影響したか？

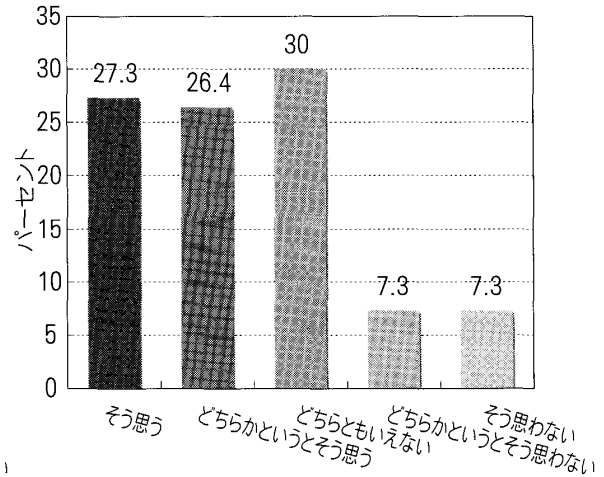


図3 就職活動時にコース制が役立ったか？

本学への入学時の影響については、「そう思う」から「そう思わない」まで、すべて同じくらいの割合になっていて、コース制が本学の入学動機になっているのが、半数以下とみることが出来る（図2）。しかし、就職活動時や現在の職場で役に立っているか、という質問に対しては、およそ60%の回答者が肯定的に評価している（図3図4）。どちらとも言えないがおよそ30%あり、評価が定まっていない卒業生もある程度いるが、否定的な評価をもったものは、わずか10%から15%であった。

さらに、コース制についての職場の上司・同僚の評価、仕事で生かしているか、今後も継続すべきかという三つの質問に対しての答えをみると、いずれも肯定的な回答が目立つ（図5図6）。上司・同僚の評価では「どちらとも言えない」が割合としては一番高くなっているが、約半数が肯定的な回答である。仕事に生かしているかどうかについては、実に77%が生かしていると回答している。そして、今後もコース制を継続していくべきかどうかの質問に対しても、68%が継続すべきだと回答している（図7）。さらに、年度別の数値を比較すると注

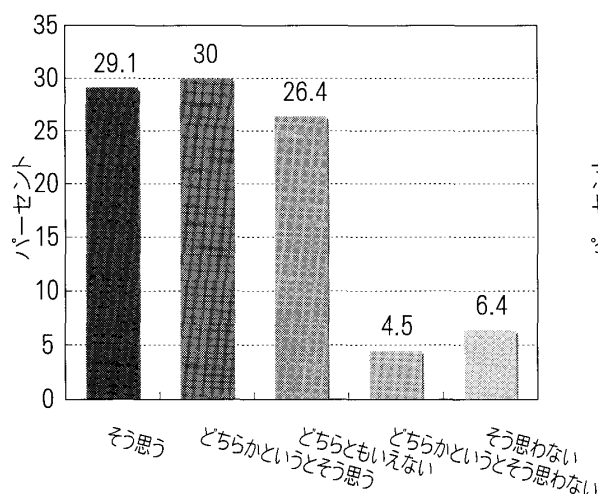


図4 コース制が職場で役立っているか？

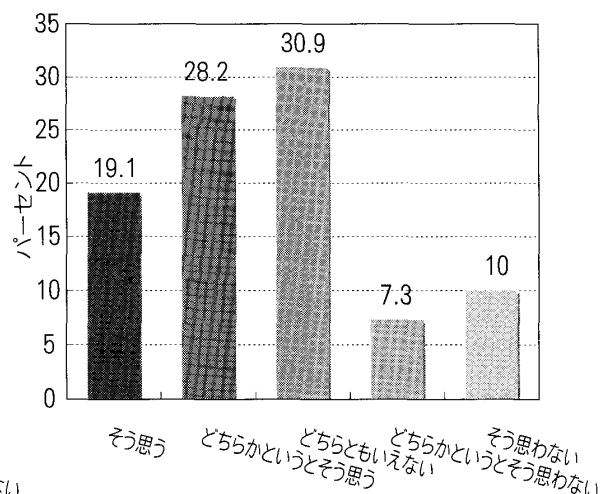


図5 コース制を上司が評価しているか？

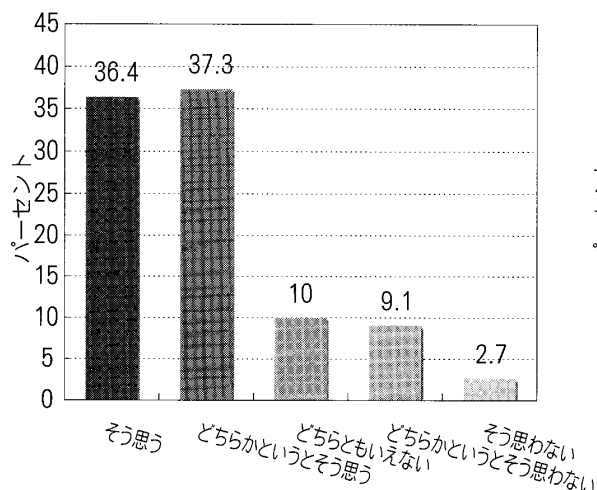


図6 コース制を仕事に活かしているか？

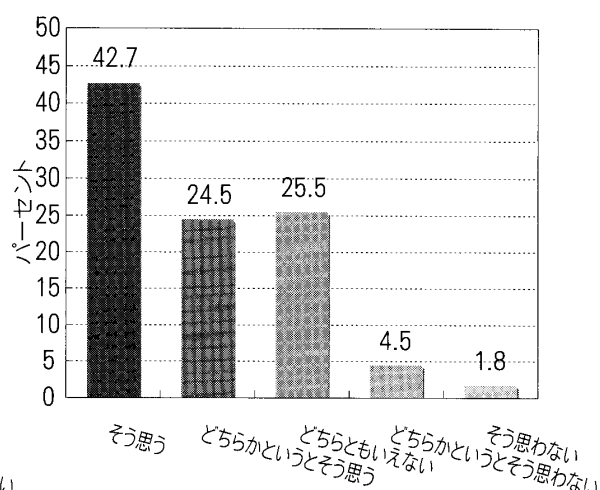


図7 コース制を継続すべきか？

目すべき傾向が現れている。継続すべきだという回答の数値が、最近の卒業生の方が高くなっている点である（図8）。これは、職場での経験が進むに連れて本人の求めるものが変化すること、職場で求められる仕事の内容が変わってくることなどが要因とも考えられ、コース制で得意分野を持つことが初期の段階での、職場への定着や能力発揮に有効であるといえる。また、子どもや幼児教育にシフトした改編されたカリキュラムが有効性をもってきたといえるだろう。

さて、次には本学科のカリキュラムについての卒業生の声であるが、本学科カリキュラムで不十分だと思う内容は、群を抜いて保育技術である（図9）。これについての自由記述回答では次のようなものがあった。「実際に働かず役立つのは実践的なことですので、手遊びや製作、身体活動、音楽についてもっと勉強したかった。（2000年卒）」「知識も大切だが、実際の経験から知識を得ることもあるので経験できる場を増やすと良いと思う。手遊びや、ペープサート、エプロンシアターなどは職場でとても役立つことなのでカリキュラムの中でこのような経

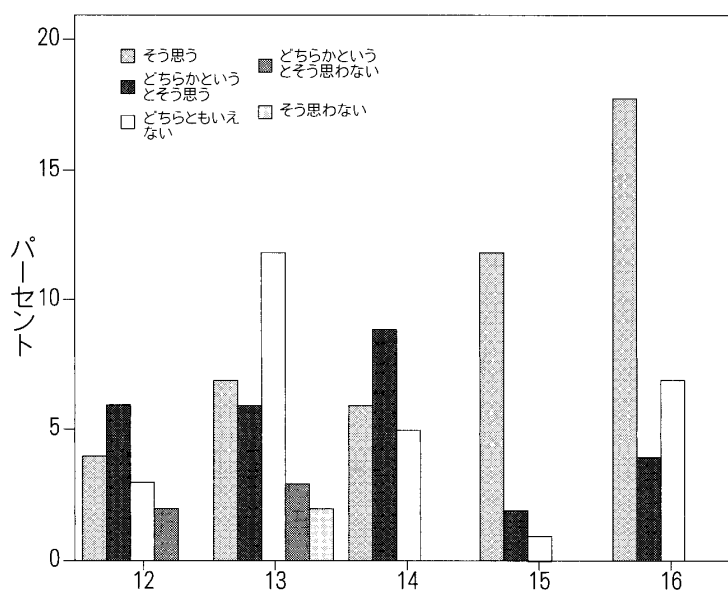


図8 コース制を継続すべきか？(卒業年度別比較)

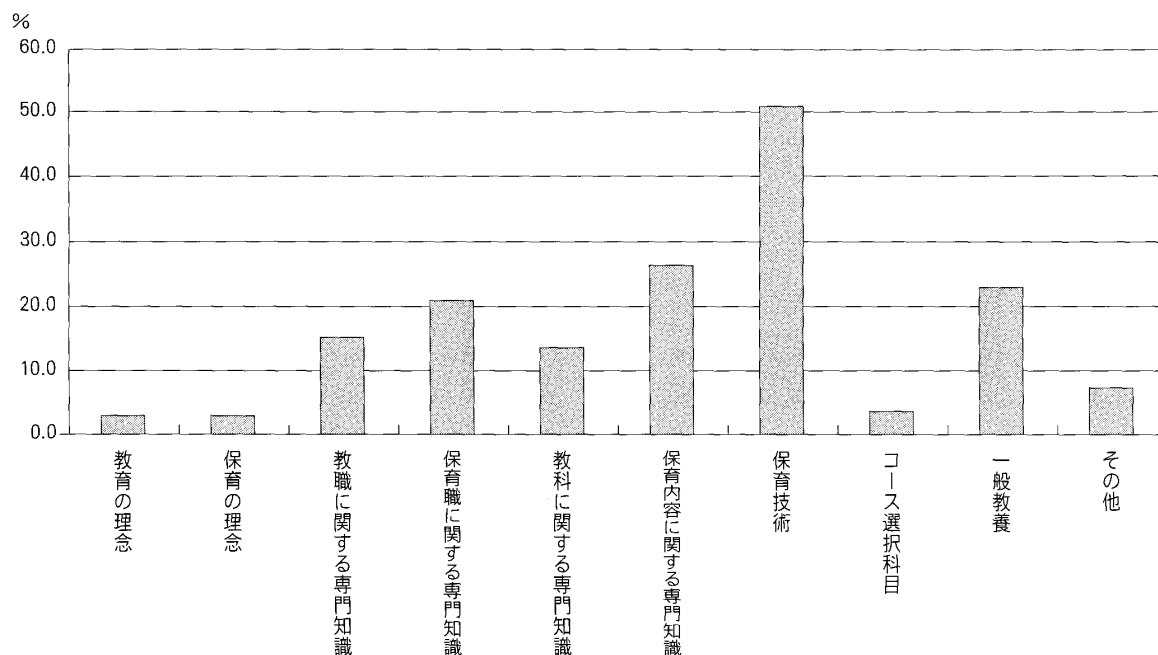


図9 初等教育学科のカリキュラムで不十分だった内容

験を活かせる内容をもっと増やして欲しい。(2001年卒)」「保育に役立つ技術的な面を養う講義が必要である。と日々感じています。例えば幼稚園で行われているリトミック、オペレッタといったことをやって頂けると自分自身の力にもなりますし、他学校とも就職する時に競争する材料にもなると思いました。(2004年卒)」いずれも、保育技術を実践的なもの、すぐに役立つものと捉えて答えている。在学生が我々教員に期待する教授内容も、圧倒的に「現場ですぐに役に立つ内容」が多い。具体的には、ピアノの弾き歌い、折紙やおもちゃ工作、手遊び、パネルシアターなどが挙げられる。

しかし、ここで言う「役に立つ」とはどういう事を意味するのだろうか。卒業生達の回答から浮かび上がるのは、待たなしの厳しい現実の中で即戦力として期待され、そこで、どうか認めてもらい実績をつくるのが「役に立つ」ことであると考えている姿である。彼らの置かれた状況の中でのそういった要望はもっともなことであるといえるが、やはり、大学ではそれらの基礎技能の背景にある意味や理念、構造といったものを理解し自分なりに創造していくというプロセスを大切にしなければならない。すなわち「役に立つ」という概念を我々大学人は常に検証する必要がある。一般的に言えば「役に立つ」ものが必ずしも教育の営みの中で「良いこと」とは限らない。目先の技能だけを求めるのではなく、自らの職業のバックボーンとなりうるものを獲得することが、学生にとっても大学で学ぶ大切な意義であるはずだ。

もちろん、我々の講義などが、厳しい現実に対する時に役に立たないというのであれば問題があろう。我々は、現場との交流をもっと行い、現場のニーズをよりの確に認識していくことが必要である。大学では理想論、現場ではただ実践のみ、という不毛な対立構造に陥る思考停止は避けなければならない。

それから、卒業生の回答にも、大学での勉強を肯定的に捉えるものが少なくない。「もっと、きちっと授業を受けておくべきだった。大学での講義プリント、教科書は大切。役に立つことが多い。(2004年卒)」というように、大学での授業の大切さに改めて気づいたという意見。「体育、音楽、図工などの教科は小学校でも活用しやすいし、自分の得意分野としても活かせるので良いと思います。国、算、理、社などよりも活かしやすいのでは。私自身も教授での自己アピールの中に体育を得意とすることを沢山アピールすることができました。(2000年卒)」というように、コース制が得意分野を作る利点などを評価する意見などである。

これら様々な卒業生の声から考察する学生が大学に求めることは、実習はもちろん、こと、講義であってもその内容を「役に立つ」ものとして活用でき、現場の仕事に繋がる実践的な方法も学べること。基礎的な三教育および新たな専修クラスの実習なども、より現場の要請に応える内容であること。そして、大学教員が先見的な視野を持って深く研究している教育・保育の本質的な内容について教授することであろう。先述した過程でできあがった新しいカリキュラムは、それを可能にするものとして中身を創造していかなければならない。

4. これからの基礎技能の考え方

本稿においては、基礎技能を音楽、図画工作、体育の三教育に限定して述べてきたが、つまりそれは本学科のコース制についての検討も兼ねることになるからであった。実のところ、音楽・図画工作・体育教育という言葉自体に小学校の教科名が使われており、幼児教育および保育を含めて考える時には特に、これらを総称した呼び名をどうするかいまだに妥当な言葉が見つからないのが実情である。技能教科という呼び方で一応は理解される場合が多いが、実際のところ技能だけではそれぞれが目指す根本的な部分、例えば美術だと視覚リテラシーや感性の成長、想像力・創造力の育成といった視点が希薄に聞こえる。

しかしながら、本学のカリキュラムの充実度を問う卒業生のアンケートをみると、コース制に対して多くの学生が充実していると評価している反面、保育技術に対して多くの学生が不十分だったと応えている(図10)。この相関をどう見るかは今回の調査だけでは一概には言えないが、基礎技能の内容を考える上ではこれからさらに調査する必要がある。現在求められる基礎技能とはいったいどの様なものか。小学校や幼稚園・保育園の現場の責任者がどう考えているかは、本稿その3で考察する。

三教育以外の技能的な面で学校長や園長が良く話題にするのが、挨拶や言葉使い、文章力、掃除の仕方などの「職業人としての基礎技能」である。いわゆる常識的なマナーやコミュニケーション能力の不足、そして生活力の低下についてよく指摘される。子どもとはもちろんのこと、園長や同僚、あるいは保護者との簡単な会話についても、具体的方法が身に付いていないというのである。我々はこれらの能力も養成教育の中で考えていくべき基礎技能と見なすべきではないか。そのような、いわゆる社会人としての基礎技能ともいうべき内容について、新たに保育者養成に取り入れた例がある。愛知県岡崎市にある岡崎女子短期大学では、それらの内容を

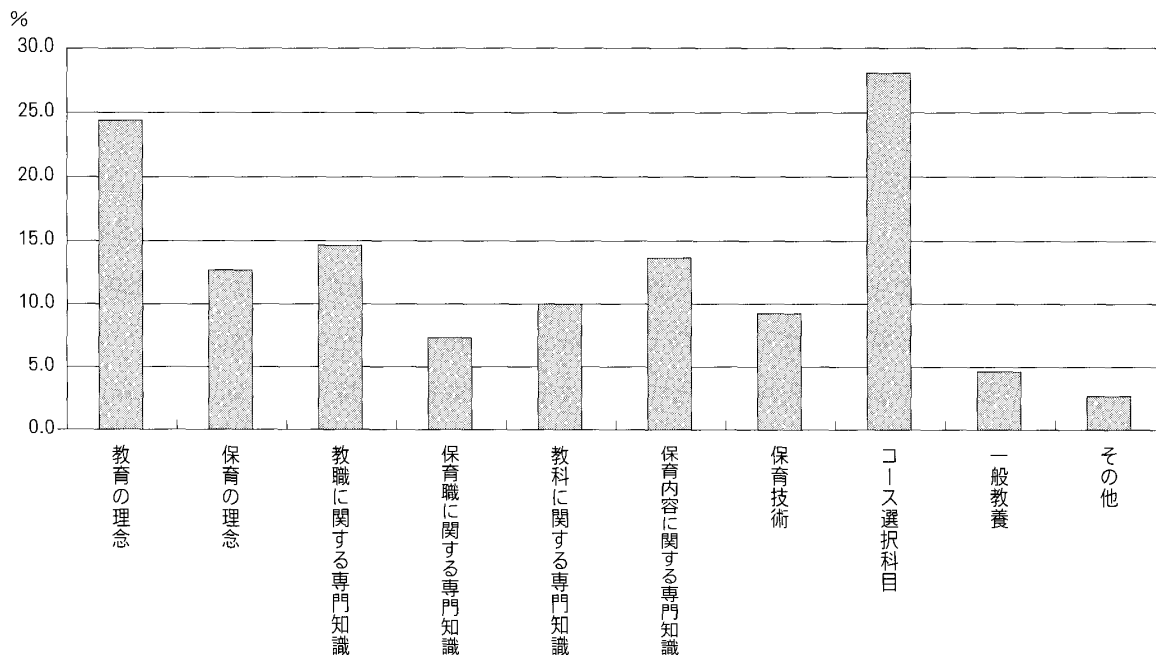


図10 初等教育学科のカリキュラムで充実していた内容

「生活支援技術」という演習科目として一年時の前期に一コマ設定し実施している。同大学は、幼児教育学科として幼稚園教諭と保育士を養成している学科であるが、三教育以外の基礎技能についても重要な技能として、系統づけてカリキュラムの中に位置づけている。

もう一点、基礎技能の考え方について参考になる例がある。前項でまとめたが、卒業生の多くがコース制を支持している理由は、コース制の履修科目そのものに対する評価だけではなく、それぞれの専門性を生かした様々な行事に意義を感じている点である。「コース選択する際、得意（興味がある）だから選んだ人、逆に苦手なことを克服するため選ぶ人と様々だと思われるが、ひとつのことに真剣に取り組んだり、同じコースの人と取り組む中で学んだり気づくこともあり良いと思います。(2001年卒)」「それぞれのコースがクラスになっていて、まとまっていると活動ができて良かった。(2004年卒)」という声に代表されるように、大学在学中の授業以外の様々な活動を通して得られるものも少なからずあるということを考えなくてはならない。それは、友人との共同作業であったり、学外の人たちとの交流であったりするが、いずれにせよ、コミュニケーション能力、他者と共感し協同する能力を高めるものである。そういった時間も確保させながら、過密なカリキュラムをこなすようにするのは、相当な努力が必要ではある。千葉経済大学短期大学部では、そのような点を解消するような取り組みが行われている。2004年度から「子ども学科」を導入し、幼児から子どもへと視点を移した内容で取り組んでいる同大学は、小学校教諭と幼稚園教諭の免許状を取得する初等教育コースと保育士資格と幼稚園教諭免許状を取得する保育コースの2本立てで、三つの免許資格を同時に取得することはできない点が本学科と違うが、基礎技能の充実ということでとても興味深い実践をしている。それは、地域の子どもたちを対象とした「子ども造形教室」という公開講座である。そ

の講座は、通常行われている大学の教員が講師となって地域の子どもたちに造形を教えるというものではなく、造形担当教授の指導の元、学生が主体となって指導方法を考え、実際の指導も学生が中心となって実施しているのである。このような教授対象や教授方法の融合型演習はこれからもっと増やしていかなければならないだろう。

5. ま と め

ここ7年間の我々のカリキュラム改編の取り組みは、それぞれの教育・保育機関や子ども、保護者、そして社会的なニーズに対しては、新しい視点を取り入れながら、積極的に応えようとしてきた。しかし、まだ検討課題は多い。2年間という限られた時間で、しかも大学外での実習時間も相当数確保しなければならない状況に於いて、本学科の養成教育はどうあるべきか。卒業生が将来に渡って仕事を続けていくために、この2年間で何を勉強すべきか、我々教員は何を教えるべきか、などである。これまでの音楽、美術（図画工作）、体育というような従来の領域概念にとらわれた考え方だけでは、学生のニーズはもちろんのこと、保育や教育現場からの要請からも離れていきかねない。しかし、豊かな子どもの成長や、教育・保育の本質的な向上を求める社会全体の要請を考えると、その場しのぎ的な安易な内容では、本当の意味での子どもからのニーズ、つまりは人間形成に必要な不可欠な事柄を子どもに身に付けさせるということは難しくなるのは明らかである。

今回の研究をふまえて、本学科における三教育を含めた「基礎技能」のあり方を、総合的に考察し、これから新しいカリキュラムの元で実施される教育活動がどの様に実を結ぶか、さらに調査研究を進めなければならない。

6. 最 後 に

今回の卒業生へのアンケート調査と面談調査は、本研究のデータ収集のために実施されたが、卒業生をサポートする機会を作るということも重要であると感じた。さらに、卒業生と在学生の連携も作りたいものである。そういったネットワーク作りも視野に入れ、今後も有効なカリキュラム検討を続けなければいけない。

最後に、アンケートに答えてくれた卒業生、ならびに面接調査に協力してくれた卒業生に感謝し、彼らの今後のますますの活躍を祈念するものである。

(付記)

本研究は、平成16年度（2004年度）北海道浅井学園大学短期大学部特別研究費の助成を受けた。

参 考 文 献

守山均, 2004, 保育者養成教育における基礎技能のあり方に関する研究 (No.2) -旧カリキュ

100 林・高野・晴山・桑原・水谷・関谷・川村・紺野・出淵・谷本・星・菊地・青池：
小学校教諭及び保育者養成カリキュラムの検討 その2

ラム学生の調査結果から－岡崎女子短期大学研究紀要第37号

三好理夫，2004，平成16年度（2004年度）千葉経済大学短期大学部「子ども造形教室」実施要項